多変量解析からみた心理発生的欲求の分類と構造

白梅学園短期大学　荻　野　七　重
立正大学　斎　藤　　勇

行動にもっとも直接的に関連する心理プロセスは欲求である。この点から欲求の研究は，行動の理解，心理プロセスとしての欲求自体の理解，そして心理プロセスと行動の関連の理解等，心理学において重要な研究テーマといえる。そのなかで，欲求全体の分類と相互の関連図式等，欲求構造の研究は特にベイシックな課題である。しかし心理学史のなかで，このテーマが十分に研究されてきたかというとそうとはいえない。心理学研究において法則重視の研究志向から分類研究が等閑視されてきたことはいなめない。またその一因は，これまでは方法が困難であったことにもよるであろう。しかし，近年多変量解析が発展し，コンピュータ利用が容易になった。そのアプローチから，欲求構造を研究することの有効性が考えられる。本研究は，このような視点に立脚し，欲求，特に社会的欲求について，因子分析とクラスター分析を用いて，欲求の分類と構造を明らかにすることを研究の目的としている。

社会的欲求の分類と構造の図式化研究は，Murray (1938) にはじまるといえよう。Murrayは，その著『Explorations in Personality』において，自らのNeed-Press仮説や欲求分類の考え方は，McDougall (1908, 1923) やFreud (1900, 1933) によるとしている。.しかし，McDougallや Freudは人間全体の欲求の分類や図式化を研究の目的としてはいない。その意味で，Murray の研究が本格的な欲求の分類と図式化の出発点といえる。

Murray は，まず欲求（Need）を人体臓器と直接関連する臓器発生的欲求と，臓器とは直接関連しない心理発生的欲求とに大別している。そして，臓器発生的欲求を3カテゴリー，13欲求（たとえば，食欲求や排泄欲求等）に分け，また心理発生的欲求を７カテゴリー，27欲求（たとえば恭順欲求，中和欲求等）に分けている。さらに心理発生的欲求については，各欲求について従属する欲求と被従属の欲求とを明示し，欲求間の関連を図式化している。Table 1　はMurray の分類を示したものである。

この Murray の分類と図式化は，ハーバード大学の51名の男子大学生を被験者として行った面接調査，実験，長期観察にもとづくケース・データから仮説したものである。その研究過程で，心理発生的欲求には，抑圧されている潜在的心理発生的欲求と意識されている顕在的心理発生的欲求とがあることを加えている。

本研究のデータ収集において，児玉昌久氏，小嶋正敏氏のご尽力をいただいた。記して感謝いたします。

Table 1　Murrayの心理発生的欲求

A）主として、無生物に関係した欲求		
1　獲得欲求	2　保存欲求	3　秩序欲求
4　保持欲求	5　構成欲求	
B）野心や権力に関係した欲求		
6　優越欲求	7　達成（成就）欲求	
8　承認欲求	9　顕示欲求	
C）地位防衛に関係した欲求		
10　不可侵欲求	11　屈辱回避欲求	12　防衛欲求
13　中和欲求		
D）力の行使にに関係した欲求		
14　支配欲求	15　服従欲求	16　同化欲求
17　自律欲求	18　対立欲求	19　攻撃欲求
20　屈従欲求		
E）禁止に関係した欲求		
21　非難回避欲求		
F）愛情に関係した欲求		
22　親和欲求	23　排除（拒否）欲求	
24　養護欲求	25　救護（依存）欲求	
G　質疑応答に関係した欲求		
26　認知欲求	27　証明欲求	

Murray 以後，社会的欲求の研究は，この Murray の分類にのっている欲求の個別の研究が発展した。主なものだけでも McClleland (1961, 1975) の達成欲求や支配欲求の研究，Schachter (1959) の親和欲求，Latané & Darley (1968) の援助欲求，Berkowitz (1962) の攻撃行動の社会心理学的分析などがあげられ，その研究成果の蓄積は著しいものがある。

ところが，他方，欲求全体の分類と図式化の研究はあまり発展していない。Murray以後この分野では目立った研究がみられず，このため欲求の分類や図式化というと研究の出発点である Murray の研究が，今でももっとも詳細な研究とされている。

ところで，心理学の分野では，近年，多変量解析の発展が著しい。特に大型コンピュータによる大量データ処理が容易になるに従い，心理学の各分野のテーマに対して数理的なアプローチがなされるようになってきている。多変量解析中，特に因子分析やクラスター分析は，諸心理過程の分類や心理的構造の発見には非常に有効なツールとされる。

そこで本研究では，Murray が51名の面接や調査から案出し，理論化した社会的欲求（心理発生的欲求）の分類と図式化をもとに，より多数の被験者のデータに基づいて，多変量解析により数理的に社会的欲求についての分類と図式化を行なうことを試みた。その結果は，Murrayの心理発生的欲求の分類や図式化の数理的実証や，欲求分類や図式化の問題点の発見を提出すると期待される。また加えて，本調査によって得られた欲求分類を用い

て，この調査の被験者となった大学生の欲求得点の結果を見直すことにより，現今の大学生の欲求の特徴をとらえることができるであろうと考える。

方　法

予備調査

本調査に先立ち，2回にわたって調査を行った（1986,1987年）。第1回の調査では，Murray の欲求分類表をもとに，顕在的心理発生的欲求（社会的欲求）として，28個の欲求を仮設定し，各欲求を測る具体的調査項目として，168項目（28欲求×6項目）の質問からなる調査票を作成し，7段階の評定尺度法（下記の本調査の項参照）を用い，大学生男女148名に調査を実施した。これによって得られたデータについて，質問項目168を変数とする因子分析を行い，プロマックス回転後の因子構造を求めた。結果は，特定の欲求の設問として設けた複数の質問項目が，特定の因子に集約されるというよりも，複数の因子に離散する形が多くみられた。そこでこの結果をもとに，仮設定欲求の数を36欲求に増やし，216項目（36欲求×6項目）の質問からなる調査票を作成し，大学生男女184名に実施した。この2回目の調査結果に対しても前回と同様の因子分析を行った。その結果，やはり前回と同様の傾向がみられたので，それをもとに欲求の種類をさらに増やし，個別欲求として59欲求を設定した。

本調査

被験者　大学生　640名（首都圏　2大学　1短大　1専門学校。　男子320名　女子320名）

質問紙調査票　予備調査の結果に基づいて設定した59欲求について，各欲求に8項目づつの具体的質問項目を作成し，472項目（59欲求×8項目）からなる調査票を作成した。回答には各項目に以下のような7段階の評定尺度をもうけた。

是非そうしたい	＋3
そうしたい	＋2
どちらかというとそうしたい	＋1
どちらともいえない（分からない）	0
どちらかというとそうしたくない	－1
そうはしたくない	－2
絶対そうはしたくない	－3

調査に用いた59欲求および各欲求について設定した質問項目の代表例を Table 2 に示した。これらの項目の全内容については斉藤・荻野(1993)に詳しい。

調査実施方法　大学等のクラスにおいて，本調査票を配布し，記名の上，質問紙に回答させ，収集した。集団調査法である。

欲求分析の手順

(1)　各欲求の調査項目が，当該欲求と適確に対応するようにする（項目の妥当性を高める）ことと変数の数を減らすことを目的として，472項目を変数とする因子分析を行なう。ただし，472項目を一度に変数とする因子分析は技術的に困難であったので，240変数と

Table 2　欲求に対応する質問項目の代表例

	欲　求	質　問　項　目
1	自　尊	友人や同僚との競争には負けたくない。
2	競　争	競争によって良いものができる。常に競争していたい。
3	優　越	争ってでも、ライバルには勝ちたい。
4	攻　撃	なぐらないと分からないときがある。そんなときはなぐりたい。
5	反　発	”目には目を”の通り、やられたらやり返したい。
6	流　行	私は新しいものが好きなので、流行の先端のものを手にいれたい。
7	自己顕示	注目を集め、みんなの評判になりたい。
8	指　導	リーダーシップを発揮し、集団をまとめ、強化したい。
9	名　誉	社会的に名誉ある地位につきたい。
10	支　配	人に命令し、指示しながら仕事をしたい。
11	権　力	社会で活躍できるような地位と権力をもちたい。
12	愛　情	愛する人（異性）のために頑張り、一生を共にしたい。
13	恋　愛	好きな異性の望みをかなえてあげ、その人から好かれたい。
14	愉　楽	みんなと一緒にワーッと騒ぎたい。
15	自　由	私は拘束されるのが嫌なので、自分の自由な生活をしていきたい。
16	自己表現	自分の個性をはっきりとアッピールしたい。
17	不満解消	日頃のストレス解消のため、思いきり気分転換したい。
18	達　成	目標を決めて仕事や勉強をはじめたら、困難があっても克服して頑張り続けたい。
19	内　罰	事がうまくいかなかったとき、自分に悪い点はないか反省したい。
20	自己成長	あらゆる機会を利用して自己を充実、成長させたい。
21	持　続	初志は貫徹し、根気よく続けていきたい。
22	自己実現	人生計画をしっかりたて、日々努力したい。
23	知　識	勉強すると知識が増え、楽しいので、多くのことを学びたい。
24	自己主張	自分が正しいと思ったことは、遠慮なく、腹蔵なく主張したい。
25	批　判	人が悪いことをしたときは、悪いとはっきりと指摘し、正させたい。
26	趣　味	自分の生きがいとして、一生趣味を持ち続けたい。
27	感　性	丘の上で空の雲をながめていたい。
28	理　解	物事の因果関係は科学的、合理的に考えていきたい。
29	他者認知	殺人事件や誘拐事件について詳しく内容や動機を知りたい。
30	好　奇	海外旅行をし、今まで知らなかったことを知りたい。
31	秩　序	社会的規範を守り、しっかりした生活をしていきたい。
32	援　助	弱い人や困っている人の面倒をみたり、世話をしてあげたい。
33	集団貢献	所属している集団のために全力をつくしたい。
34	社会貢献	住みよい社会をつくるために貢献したい。
35	教　授	自分の得意なことを先生として若者に教えたい。
36	自己認知	性格テストをやって、自分がどんな性格であるか知りたい。
37	承　認	できるだけ多くの人から好かれたい。
38	自己開示	自分のことを親しい人にたくさん話したい。
39	屈辱回避	人前で笑われるようなことはできるだけ回避したい。
40	同　調	仲間と一緒に同じ事をしたい。
41	嫌悪回避	周囲の人から嫌悪感をもたれたり、煙たがられたりしないように心がけたい。
42	批判回避	上の人からおこられるようなことはしたくないので避けたい。
43	服　従	上の人の指示、命令には黙って従い、その通りに行動していきたい。
44	優　位	友人には優越感のもてるような、自分より下の人を選びたい。
45	譲　歩	私は人と争うのが嫌いなので、争うなら譲りたい。
46	安　心	失敗しそうで、心配なことは避け、安心な方を選びたい。
47	気　楽	無理せず、あせらず、ゆうゆうとした人生を送りたい。
48	挑　戦	人生はカケなので、危険を覚悟で行動したい。
49	安　全	身に危険が生じるようなおそろしい国に行くのは避けたい。
50	拒　否	私は好き嫌いがはっきりしているので、嫌いな人とはつきあわないようにしたい。
51	金　銭	どんな活動をするにも経済力が必要なので、お金を確保したい。
52	生活安定	日常生活が困窮しているので、はやく安定した生活がしたい。
53	依　存	心配なことがあるときは、誰かに助けてもらいたい。
54	親　和	友達と一緒に旅行したり話をしたりしながら、楽しいときを過ごしたい。
55	協　力	仕事や活動はみんなで分担し、協力し合ってやりたい。
56	孤　立	できるだけ一人でいたい。
57	恭　順	信頼できる指導者に従い、忠実な活動をしていきたい。
58	自己規制	欲念を抑えて、真面目で誠実な生活をしていきたい。
59	迷惑回避	できるだけ人に迷惑をかけないようにしたい。

232変数とに無作為に分けて，それぞれについてプロマックス回転により35因子まで求める因子分析を行った。因子分析は統計パッケージ SAS (Statistical Analysis System) の FACTOR プロシジャによって行った。

(2) 先の因子分析の結果，特定の欲求のための質問項目として設定したものが，特定の因子に集中的に高い因子負荷量を示す傾向がみられた。これを参考に，各欲求の8項目のなかから，その特定の因子に負荷量の高い項目を4項目ずつ選び，これを以後の統計処理の対象として用いることにした。この項目選定のプロセスと各欲求について選択した質問項目についての詳細は斎藤・荻野(1993)を参照されたい。

(3) 欲求の分類とその構造を求めるために，各被験者について，59欲求のそれぞれについて，上記4項目の平均得点を算出し，これを用いて59欲求を変数とする因子分析とクラスター分析を行った。因子分析にはプロマックス法を用い，SASのFACTOR プロシジャによって行った。クラスター分析は，次の２通りの分析の結果を検討することにした。

一つは，先に述べた FACTOR プロシジャの後に，変数をクラスタリングするための VARCLUS プロシジャを置き，FACTOR プロシジャで作成したデータセットからスコアリング係数を読み込んで非階層的クラスターを求めたものであり，他の一つはVARCLUS プロシジャに TREE プロシジャを加えて，階層的クラスターとそのツリー・ダイヤグラムを求めたものである。

(4) 学生の欲求の特性をみるために，各欲求の４項目の得点の平均値を，その欲求に関する各個人の欲求得点とし，男女別にその平均値を求めた。

結果と考察

１．因子分析からの欲求のカテゴリー化

プロマックス回転による５９欲求の因子分析の結果は Table 3 の通りである。

第１因子の因子負荷量が大きな欲求をみると達成欲求，持続欲求，自己実現欲求，自己成長欲求などである。このことから第１因子は勉学や活動，さらには自己を含んだ達成志向の欲求群といえる。また第１因子の負荷量の大きい欲求をさらにみていくと，内罰，秩序，知識，社会貢献，自己規制，恭順，迷惑回避，集団貢献，援助，協力欲求があがってくることから，第１因子のもつ社会適合的，自己抑制的側面が浮かび上がってくる。これらの欲求が達成欲求と関係する点は興味深く，文化の特徴かもしれないとも考えられ，クロス・カルチュラルな研究の必要性を感じさせる。第１因子にはさらに援助，協力，承認，自尊，競争，批判といった欲求も負荷量が高く，他者を助け，自己を認めさせ，他者を越えようとする力の側面が含まれている。総合して達成志向の欲求群ということができる。Murrayの分類の，野心や権力に関係した欲求に対応するといえよう。

次に第２因子の因子負荷量の大きい欲求をみると，名誉欲求，権力欲求，自己顕示欲求，支配欲求などである。これらは，いずれも人をコントロールしたい，人の上に立ちたいという欲求であることから，権力志向の欲求群といえる。この第２因子群は Murray の分類カテゴリーでみると，第１因子の場合と同様，野心や権力に関係した欲求にもっともよく対応する。しかし Murray の場合はこれとは別に力の行使に関係した欲求というカテゴリーが設けられ，その中に支配欲求が含まれている。さらに第２因子の負荷量の大きい欲求

Table 3　PROMAX 法によって得られた59欲求の因子構造

NO	欲　求	Fac1	Fac2	Fac3	Fac4	Fac5	Fac6	Fac7	Fac8	Fac9	Fac10	Fac11
1	達　成	0.83	0.27	0.18	-0.06	0.12	-0.19	0.20	0.11	0.27	0.20	-0.08
2	持　続	0.82	0.22	0.23	-0.03	0.15	-0.12	0.16	0.16	0.25	0.21	-0.13
3	自己実現	0.79	0.31	0.21	0.14	0.02	0.05	0.25	0.17	0.20	0.17	-0.15
4	自己成長	0.77	0.31	0.21	-0.07	0.19	-0.10	0.19	-0.03	0.35	0.12	-0.13
5	内　罰	0.72	0.10	0.32	0.04	0.26	0.09	0.24	-0.03	0.29	0.18	-0.24
6	秩　序	0.70	0.24	0.31	0.35	0.07	0.26	0.39	0.08	0.02	0.00	-0.35
7	知　識	0.67	0.41	0.12	-0.06	0.34	-0.08	0.03	-0.10	0.47	0.06	-0.03
8	社会貢献	0.63	0.30	0.23	0.15	0.23	0.03	0.52	-0.05	0.15	-0.06	-0.20
9	自己規制	0.62	0.01	0.07	0.27	-0.09	0.30	0.36	0.08	-0.13	-0.11	-0.29
10	恭　順	0.62	0.20	0.35	0.35	0.20	0.39	0.29	0.21	0.22	0.28	-0.23
11	迷惑回避	0.59	0.10	0.40	0.38	0.26	0.23	0.13	-0.08	0.18	0.36	-0.31
12	集団貢献	0.56	0.18	0.48	0.22	0.07	0.28	0.56	0.14	-0.03	0.07	-0.38
13	理　解	0.31	0.26	-0.32	-0.14	0.20	-0.09	0.23	-0.10	0.26	-0.32	0.04
1	名　誉	0.31	0.87	0.17	0.18	0.13	0.04	0.09	0.32	0.24	0.20	-0.08
2	権　力	0.22	0.85	0.11	0.10	0.11	-0.01	0.12	0.41	0.17	0.12	-0.03
3	自己顕示	0.24	0.74	0.19	-0.07	0.26	-0.13	0.10	0.28	0.40	0.51	0.02
4	支　配	0.21	0.72	0.08	0.05	0.11	-0.09	0.27	0.48	0.09	0.20	-0.14
5	流　行	0.28	0.62	0.17	0.02	0.21	0.07	0.12	0.18	0.24	0.24	-0.05
6	金　銭	0.15	0.62	0.22	0.29	0.29	0.05	-0.22	0.27	0.17	0.29	0.10
1	孤　立	-0.19	-0.06	-0.78	-0.06	0.12	0.01	-0.19	0.07	0.00	-0.12	0.19
2	愉　楽	0.21	0.28	0.78	-0.03	0.23	0.12	0.16	0.09	0.23	0.23	-0.06
3	親　和	0.34	0.27	0.75	0.24	0.36	0.17	0.18	0.14	0.33	0.36	-0.14
4	協　力	0.52	0.17	0.71	0.35	0.32	0.32	0.32	0.08	0.20	0.18	-0.33
5	承　認	0.52	0.49	0.62	0.38	0.27	0.20	0.09	0.14	0.35	0.45	-0.40
6	依　存	0.23	0.13	0.54	0.43	0.20	0.37	0.29	0.19	0.35	0.35	-0.11
1	安　心	0.03	0.03	0.08	0.83	0.04	0.42	0.14	0.12	-0.03	0.01	-0.06
2	批判回避	0.29	0.23	0.34	0.73	0.11	0.67	-0.01	0.27	0.11	0.33	-0.36
3	安　全	0.19	0.13	0.19	0.70	0.07	0.21	-0.06	0.15	0.02	0.39	0.07
4	屈辱回避	0.25	0.28	0.14	0.69	0.15	0.44	-0.14	0.31	0.10	0.23	-0.39
5	挑　戦	0.14	0.28	-0.03	-0.69	0.20	-0.25	-0.08	0.14	0.23	0.25	0.05
6	嫌悪回避	0.38	0.43	0.52	0.65	0.19	0.48	-0.05	0.22	0.21	0.42	-0.37
7	同　調	0.19	0.05	0.45	0.59	0.09	0.58	0.20	0.38	0.00	0.18	-0.30
1	自　由	-0.02	0.22	-0.04	-0.08	0.72	-0.13	-0.18	0.08	0.37	0.37	0.22
2	感　性	0.26	0.16	0.19	-0.07	0.71	0.01	0.18	-0.01	0.28	-0.03	-0.10
3	気　楽	-0.10	-0.05	-0.01	0.24	0.71	0.16	-0.04	-0.12	0.10	0.15	0.13
4	趣　味	0.44	0.21	0.32	0.02	0.56	-0.05	0.05	0.00	0.27	0.24	-0.10
5	不満解消	0.31	0.31	0.49	0.04	0.55	0.02	-0.01	0.19	0.29	0.27	0.13
6	好　奇	0.38	0.37	0.26	-0.26	0.46	-0.11	0.07	0.01	0.40	0.04	-0.09
1	服　従	0.22	0.00	0.29	0.41	-0.02	0.74	0.22	0.23	-0.02	0.13	-0.22
2	譲　歩	-0.03	-0.11	-0.01	0.32	0.16	0.70	0.04	-0.17	0.00	-0.01	0.06
3	自己主張	0.42	0.31	-0.04	-0.19	0.25	-0.60	0.24	0.20	0.26	0.33	0.01
4	批　判	0.46	0.29	0.08	-0.07	0.25	-0.48	0.43	0.31	0.22	0.28	-0.07
1	教　授	0.42	0.35	0.26	0.11	0.08	0.10	0.67	0.25	0.20	0.22	-0.13
2	指　導	0.45	0.57	0.23	-0.03	0.06	-0.03	0.64	0.30	0.14	0.16	-0.21
3	援　助	0.55	0.16	0.38	0.04	0.32	0.06	0.57	-0.11	0.27	0.12	-0.15
1	優　越	0.46	0.66	0.08	0.11	0.04	-0.05	0.02	0.68	0.14	0.45	-0.21
2	攻　撃	0.03	0.25	0.16	0.01	0.03	0.00	0.17	0.67	0.04	0.12	0.02
3	反　発	-0.07	0.42	-0.11	0.09	0.09	-0.07	-0.17	0.66	0.18	0.24	0.16
4	自　尊	0.52	0.58	0.12	0.20	0.03	0.02	-0.04	0.61	0.17	0.44	-0.34
5	競　争	0.51	0.42	0.04	-0.09	-0.07	-0.04	0.24	0.55	0.08	0.28	-0.22
6	優　位	-0.15	0.15	-0.12	0.35	0.05	0.46	0.05	0.47	-0.01	0.17	-0.03
7	拒　否	-0.16	0.18	-0.29	0.21	0.13	0.01	-0.37	0.46	0.18	0.36	0.21
1	他者認知	0.36	0.27	0.10	-0.07	0.27	-0.07	0.12	0.01	0.71	0.06	0.01
2	自己認知	0.36	0.22	0.34	0.19	0.25	0.15	0.01	0.15	0.65	0.23	-0.29
3	自己開示	0.33	0.15	0.41	0.23	0.16	0.18	0.40	0.22	0.55	0.43	-0.15
1	恋　愛	0.25	0.57	0.38	0.19	0.27	0.13	0.22	0.29	0.14	0.58	-0.15
2	自己表現	0.34	0.49	0.18	-0.18	0.28	-0.15	0.14	0.17	0.45	0.55	-0.05
3	愛　情	0.31	0.34	0.36	0.19	0.32	0.14	0.31	0.16	0.02	0.52	-0.08
1	生活安定	0.14	0.19	0.08	0.16	0.13	0.14	0.03	0.20	0.07	0.15	0.57
	寄与量	10.58	8.10	6.40	5.62	4.33	4.43	3.93	4.50	4.07	4.60	2.55

注　表中の欲求群のクラスター化は、因子分析の結果を　SAS の VARCLUS プロシジャを用い、非階層的クラスターとして確定したものである。

をみていくと，優越，流行，金銭，自尊，指導，恋愛，自己表現，承認欲求などがあがってくる。お金を求めるのも，流行を追うのも，人をコントロールすることと強く関連していることが示唆されて興味深い。

第3因子の因子負荷量の高い欲求は孤立欲求（負荷量は負の値をとる。以下このようなものは負とのみ記す），愉楽欲求，親和欲求，協力欲求，承認欲求，依存欲求などであり，人と一緒にいて，お互いに認めあい和みたいという人間関係的欲求である。これは親和欲求群といえる。さらに負荷量の高い欲求をみていくと，嫌いな人を避けたいという嫌悪回避欲求，ストレス解消や気分転換をはかりたいという不満解消欲求，集団貢献欲求があがってきている。この欲求群は Murray の愛情に関連した欲求カテゴリーに対応するといえる。なお本調査の設定した愛情欲求は，親とか師弟関係ではなく，異性に対する愛情を意味したものである。

第4因子の因子負荷量の大きい欲求は，安心欲求，批判（非難）回避欲求，安全欲求，屈辱回避欲求，挑戦欲求（負），嫌悪回避欲求，同調欲求などネガティブな刺激や人を回避し，安全で安心できる状況を志向する安全志向の欲求群といえる。この欲求群は Murray の地位防衛に関連した欲求カテゴリーに対応するといえる。

第5因子の因子負荷量の高い欲求は自由欲求，感性欲求，気楽欲求，などである。社会の規制からまた家庭の束縛から解放されたいという自由志向欲求群といえる。さらに負荷量の高い欲求をみていくと趣味，不満解消，好奇欲求など，何か楽しいこと，新しいことを求める欲求群であることが分かる。Murray の欲求カテゴリーにはこれに相応するものはない。現代人の特に若者の求めている欲求かもしれない。

第6因子に因子負荷量の高い欲求は服従欲求，譲歩欲求，批判回避欲求，自己主張欲求（負），同調欲求，などの欲求群である。さらに負荷量の高い欲求をみていくと，批判欲求（負），嫌悪回避欲求，優位欲求があげられる。これは自己主張せず，人に従ったり，嫌われないようにしたり，自分よりも優れた人との接触を避けるというような消極的対人関係を示す欲求群であり，対立回避的欲求群といえる。Murray の地位防衛に関係した欲求に対応する。

第7因子で因子負荷量の高い欲求は教授欲求，指導欲求，援助欲求，社会貢献欲求，集団貢献欲求である。人を教えたり，人のためになったりというボランティアを含む援助志向欲求群である。Murray の分類では援助欲求は愛情に関係した欲求に入っている。

第8因子の因子負荷量の高い欲求は優越欲求，攻撃欲求，反発欲求，自尊欲求，競争欲求などである。相手と対立し，自分が優位でありたいとする競争の欲求群といえる。さらに負荷量の高い欲求をみていくと，支配欲求，優位欲求，嫌いな人にはかかわりたくないという拒否欲求があがってくる。これらの点からみると，この欲求群は人をライバル視し，ネガティブな対応をする対立志向欲求群であるといえよう。Murray の欲求カテゴリーではこれら対人的にネガティブな欲求のうち，攻撃欲求と支配欲求は力の行使に関係した欲求の中に，拒否欲求は愛情に関係した欲求の中に入っている。しかし，対人関係においては，相手に立ち向かうか，無視するか，対立するかは非常にベーシックな問題といえる（Horney,1939）。その点から考えると，対立的欲求群は一つにカテゴライズしてまとめた方が適当といえるかもしれない。

第9因子に負荷量の高い欲求群は他者認知欲求，自己認知欲求，自己開示欲求，自己表

現欲求などである。他者の起こした事件や，出来事への関心，自己の性格や能力，他人の思惑への関心の高さを示す欲求群で自他に対する認知志向的欲求群といえる。Murray の分類には質疑応答に関係した欲求として，認知欲求，証明欲求があげられており，これに対応するといえよう。

第10因子の負荷量の高い欲求は恋愛欲求，自己表現欲求，愛情欲求である。恋愛欲求と愛情欲求はともに異性を対象とした質問項目が設定されており，前者が相手の心を動かすことを内容とするのに対し，後者はともに過ごすことを内容としている。これらの他には承認欲求の負荷量が高い。人にに好かれ，認められ，共に過ごすというような人間関係における愛情志向欲求群といえる。Murray の分類の愛情に関係した欲求に対応する。

最後の第11因子の負荷量の高い欲求は生活の不安定から逃れたいという生活安定欲求の１欲求のみである。Table 3 をみると，この欲求は他の因子への負荷量はすべて低い。また他の欲求でこの因子への負荷量の高いものにも目立ったものがない。強いてあげれば，集団貢献欲求（負），協力欲求（負），批判回避欲求（負），屈辱回避欲求（負），嫌悪回避欲求（負）などの欲求に比較的高い負の因子負荷量がみられる。これは生活安定欲求が人に力を貸したり，人から加えられる不快な刺激を積極的に避けたりするという心理的ゆとりがない性質を持っていると考えられる。Murray の分類では，主として無生物に関係した欲求の一つに当たるのではないかと考えられる。

２．クラスター分析からの欲求の構造化

１）先に述べたプロマックス回転による因子分析にクラスター分析を加えることによって得られた非階層的クラスターが Table 4 である。この分析結果は，Table 3　の11クラスターがさらに分離を繰り返して 16 クラスターとして確定したものである。第１因子を構成する達成志向欲求群は，達成，持続，自己成長，自己実現などの達成欲求群と，なかでも社会性の性格の強かった秩序，恭順，社会貢献，集団貢献からなる社会適応的欲求群とに分離し，第４因子の安全志向欲求群は，批判回避，嫌悪回避，屈辱回避欲求などからなる回避欲求群と，安心，挑戦，安全欲求からなる安全欲求群とに分離した。また第５因子の自由志向欲求群は感性，趣味，不満解消欲求からなる感性欲求群と，自由，気楽欲求からなる優越欲求群とに，第８因子の対立志向欲求群は名誉，権力，自己顕示欲求に代表される権力欲求群と，優越，自尊，競争欲求からなる優越欲求群とに分かれた。

２）先に述べた16クラスターは，そこに樹構造の存在を示唆するものでもある。

Table 5 は階層的クラスター分析を行って得た結果であり，そのツリー・ダイアグラムが Fig 1 である。この階層的クラスターも最終的に16クラスターに分かれた。その内容は後述するように細部に違いはあるが全体として非階層的クラスター分析の結果とよく一致している。なお Table 5 は Table 4 と比較しやすくするためにクラスター順を入れ換えている。以後，Table 4 の非階層的クラスター分析の結果をＡ，Table 5 の階層的クラスター分析の結果をＢと呼ぶことにする。

ＡとＢの16のクラスターを比較したときに最も違いを示しているのは，クラスター１とクラスター 7 である。しかしＡ，Ｂとも，それぞれクラスター１とクラスター 7 を加えると同じような欲求群が含まれることになる。Ａでは秩序，内罰，恭順，自己規制，集団貢献，社会貢献，迷惑回避，援助，指導，教授欲求がそれであり，ここから内罰と指導を

Table 4　59欲求の因子回転後の非階層的クラスター分析の結果(A)

Cluster (欲求群)	Variable (欲求)	A)R*R with Own Cluster	B)R*R with Next Cluster	(1-A)/(1-B)
1 社会的	秩序	0.68	0.31	0.47
	内罰	0.51	0.40	0.81
	恭順	0.53	0.24	0.62
	自己規制	0.49	0.24	0.67
	集団貢献	0.52	0.31	0.69
	社会貢献	0.53	0.33	0.71
	迷惑回避	0.45	0.22	0.70
2 権力	流行	0.39	0.21	0.77
	自己顕示	0.63	0.37	0.59
	名誉	0.80	0.29	0.29
	金銭	0.44	0.14	0.65
	支配	0.61	0.28	0.55
	権力	0.78	0.28	0.30
3 親和	依存	0.45	0.25	0.73
	親和	0.71	0.22	0.37
	承認	0.57	0.33	0.65
	協力	0.62	0.39	0.61
	孤立	0.48	0.06	0.55
	愉楽	0.59	0.16	0.49
4 回避	屈辱回避	0.67	0.22	0.42
	同調	0.54	0.21	0.58
	嫌悪回避	0.73	0.37	0.43
	批判回避	0.83	0.28	0.24
5 感性	趣味	0.52	0.17	0.58
	感性	0.58	0.13	0.49
	好奇	0.48	0.15	0.62
	不満解消	0.52	0.23	0.63
6 自己主張	自己主張	0.88	0.21	0.15
	批判	0.88	0.24	0.16
7 指導	援助	0.52	0.38	0.77
	指導	0.77	0.33	0.35
	教授	0.76	0.22	0.30
8 優越	自尊	0.80	0.29	0.28
	競争	0.70	0.19	0.37
	優越	0.85	0.41	0.25
9 認知	自己認知	0.66	0.16	0.40
	他者認知	0.53	0.16	0.56
	自己開示	0.51	0.28	0.68
10 愛情	愛情	0.73	0.19	0.33
	自己表現	0.41	0.24	0.77
	恋愛	0.80	0.33	0.30
11 安定	生活安定	1.00	0.05	0.00
12 対立	攻撃	0.36	0.12	0.73
	拒否	0.55	0.05	0.47
	優位	0.39	0.12	0.69
	反発	0.70	0.19	0.37
13 達成	理解	0.21	0.05	0.84
	達成	0.81	0.37	0.30
	自己成長	0.67	0.37	0.52
	持続	0.74	0.38	0.42
	自己実現	0.66	0.43	0.60
	知識	0.58	0.23	0.55
14 安全	安心	0.82	0.31	0.26
	挑戦	0.69	0.09	0.34
	安全	0.55	0.25	0.61
15 自由	自由	0.77	0.17	0.28
	気楽	0.77	0.08	0.25
16 譲歩	服従	0.70	0.25	0.40
	譲歩	0.70	0.13	0.35

Table 5　59欲求の因子回転後の非階層的クラスター分析の結果(B)

Cluster（欲求群）	Variable（欲求）	A)R*R with Own Cluster	B)R*R with Next Cluster	(1-A)/(1-B)
1 恭　順	恭　順	0.65	0.31	0.50
	自己規制	0.56	0.27	0.60
	迷惑回避	0.58	0.24	0.56
2 権　力	流　行	0.38	0.18	0.76
	自己顕示	0.63	0.33	0.56
	指　導	0.53	0.38	0.76
	名　誉	0.76	0.29	0.34
	支　配	0.66	0.28	0.47
3 親　和	権　力	0.77	0.28	0.32
	依　存	0.55	0.29	0.63
	親　和	0.71	0.36	0.45
	協　力	0.65	0.34	0.52
	孤　立	0.50	0.16	0.60
4 回　避	屈辱回避	0.67	0.22	0.42
	同　調	0.54	0.24	0.60
	嫌悪回避	0.73	0.37	0.43
	批判回避	0.83	0.30	0.25
5 感　性	趣　味	0.45	0.20	0.69
	感　性	0.51	0.19	0.61
	理　解	0.22	0.12	0.88
	他者認知	0.40	0.15	0.71
	好　奇	0.50	0.17	0.60
6 自己主張	自己主張	0.88	0.20	0.15
	批　判	0.88	0.21	0.15
7 援　助	秩　序	0.57	0.47	0.82
	援　助	0.61	0.27	0.53
	集団貢献	0.61	0.28	0.54
	社会貢献	0.68	0.33	0.48
	教　授	0.45	0.23	0.72
8 優　越	自　尊	0.80	0.30	0.29
	競　争	0.70	0.22	0.39
	優　越	0.85	0.41	0.25
9 承　認	自己認知	0.61	0.14	0.46
	承　認	0.64	0.41	0.60
	自己開示	0.59	0.30	0.59
10 愛　情	愛　情	0.75	0.17	0.30
	恋　愛	0.78	0.33	0.33
	愉　楽	0.39	0.43	1.07
11 安　定	拒　否	0.45	0.18	0.67
	金　銭	0.58	0.25	0.56
	生活安定	0.42	0.05	0.61
12 攻　撃	攻　撃	0.70	0.12	0.34
	反　発	0.70	0.24	0.39
13 達　成	達　成	0.81	0.32	0.28
	内　罰	0.55	0.35	0.70
	自己成長	0.67	0.29	0.46
	持　続	0.76	0.29	0.34
	自己実現	0.65	0.37	0.56
	知　識	0.55	0.34	0.69
14 安　全	安　心	0.82	0.31	0.26
	気　楽	0.12	0.11	1.00
	挑　戦	0.64	0.14	0.42
	安　全	0.54	0.25	0.62
15 自　由	自　由	0.52	0.13	0.55
	自己表現	0.53	0.26	0.63
	不満解消	0.58	0.20	0.53
16 譲　歩	服　従	0.61	0.25	0.53
	優　位	0.46	0.12	0.61
	譲　歩	0.58	0.13	0.49

除いたものがBのそれである。しかしAではクラスター1に社会的適合性ともいうべき多くの欲求群が残り，Bのクラスター1には，少数の自己抑制的性格の強い欲求群のみが入っている。これに対してAのクラスター7はそれぞれの欲求の数値から知られるように指導性の性格が強いのに対し，Bのクラスター 7は貢献，援助というように援助の性格が強い。

次に異なるのはクラスター9 である。Aのクラスター9 が自他に対する理解，認知というような性格を示すのに対し，Bのクラスター9 は自己本位的な性格，他者による自己の承認を求めるというような性格が強い。

このようにクラスター1，7，9はクラスターの構成要素にずれが認められるが，他のクラスターは完全ではないがよく一致している。その中で注目される点としてクラスター11の安定欲求を指摘することができる。Aでは生活安定欲求のみであったが，Bでは拒否欲求と金銭欲求が加わって経済的，精神的安定といった安定の要素がより濃くなっている。

3）階層的クラスター分析の結果得られたツリー・ダイヤグラム（Fig 1）をみていくと，クラスター間の関係，共通点や相違点が一層明確になる。ツリー・ダイヤグラムから以下のようなことが理解された。

心理発生的欲求は，このツリーによると，大きく二つに分けられる。1の自尊欲求から38の自己開示欲求までの38欲求と，39の屈辱回避欲求から59の迷惑回避欲求までの21欲求とである。これらの欲求の内容を検討すると，前者が能動的欲求，後者が受動的欲求といえる。つまり前者は自己，他者，事物いずれかに対して積極的に働きかけていく欲求群である。一方，後者は回避や協調を中心とする受身的な欲求群である。

さて，能動的欲求群は，図でわかるようにさらに1の自尊欲求から17の不満解消欲求までの17欲求と，18の達成欲求から38の自己開示欲求までの21欲求に分けられている。前者のほとんどが権力，攻撃，優越に関係しており，これは対人支配的な権勢的欲求群といえる。一方，後者は達成，好奇，自己認知など非権勢的欲求群といえる。権勢的欲求群はさらに1の自尊欲求から11の権力欲求までの11欲求と，12の愛情欲求から17の不満解消欲求までの6欲求に枝分かれしている。前者は競争，攻撃，権力などの欲求で優越支配欲求群といえ，後者は愛情や自由などの欲求で情的支配欲求群といえる。この優越支配欲求群は最終的に，図の最下部（ここに最終的な16クラスターが位置している）に示されるように，攻勢的欲求群ともいえる優越欲求群と攻撃欲求群，および前者に比べて対象が不特定的な権力欲求群に分類されている。一方，情的支配欲求群は，愛情欲求群と自由欲求群の2つに分類される。

能動的欲求群のもう一方の非権勢的欲求群は，18の達成欲求から30の好奇欲求までの13欲求と，31の秩序欲求から38の自己開示欲求までの8欲求に分かれている。前者は，自己成長や自己主張，感性欲求などで，勉学や活動など，後者に比べると個人的性格の強い，前向きの積極的活動欲求群といえ，後者は，援助，貢献，自己開示など，前者に比較して社会的性格の強い，前向きの関係形成的欲求群といえよう。積極的活動欲求群は，最終的には，自己拡張的欲求群といえる達成欲求群と自己主張欲求群，そして自己充足的な感性欲求群の3つに分類され，関係形成欲求群は，援助欲求群と承認欲求群の2つに分類されている。以上，能動的欲求群は，ツリー上，最終的にはaの優越欲求群からjの承認欲求群まで10欲求群38欲求に分類された。

また一方，受動的欲求群は，まず39の屈辱回避欲求から52の生活安定欲求までの14欲求

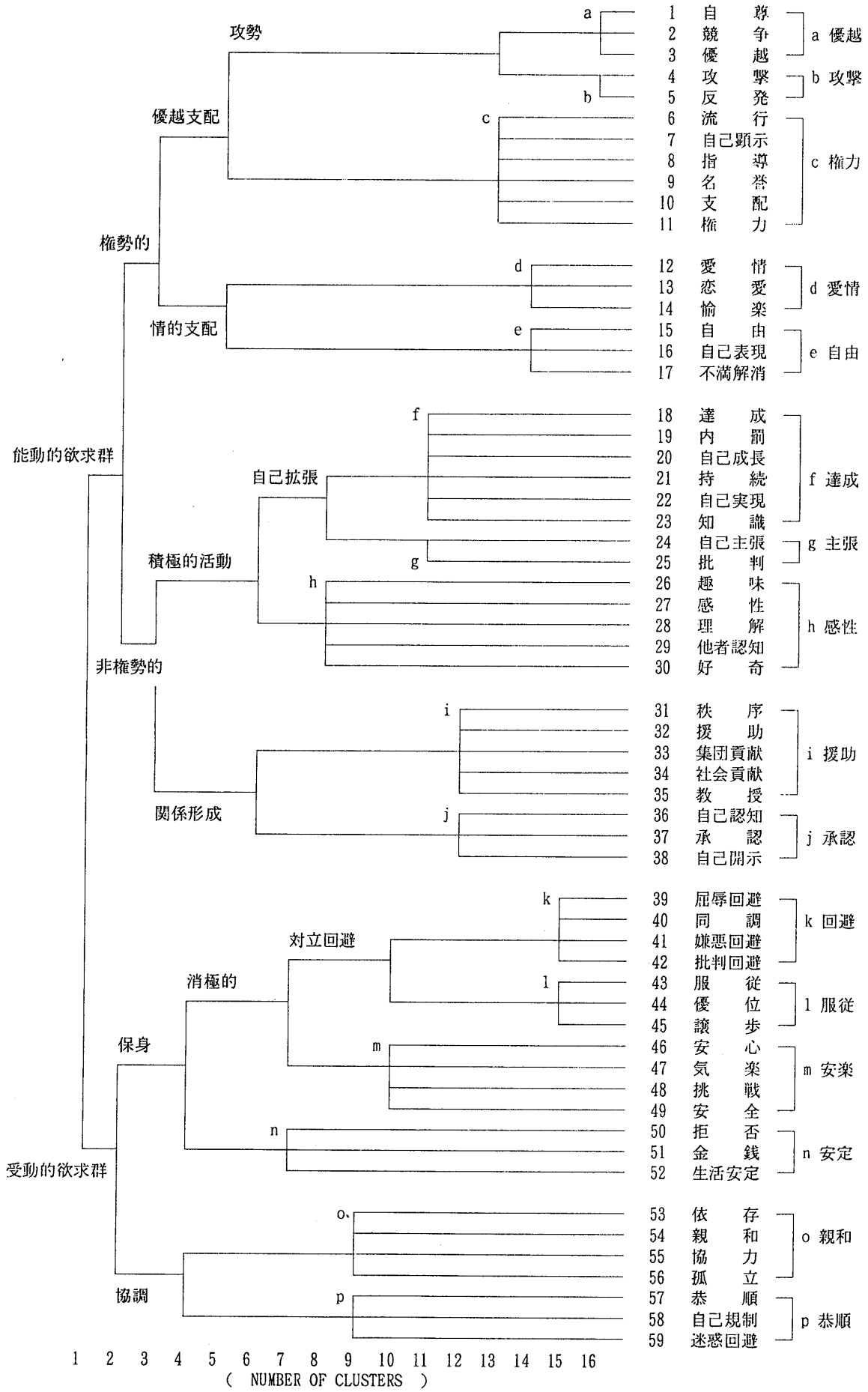

Fig 1　クラスター分析によって得られた59欲求のツリー・ダイヤグラム

と53の依存欲求から59の迷惑回避欲求までの7欲求群に分かれる。前者は批判を回避し，服従し，安心し，生活を安定したいという欲求が入っており，これは自分の身体的精神的安全を保持するための保身的欲求群といえる。後者は親和欲求，恭順欲求など他者に合わせる欲求が入っており，協調的欲求群といえる。保身的欲求群は，さらに，図に示されるように消極的な欲求群と積極的な欲求群とに分かれる。前者は対立を回避しようとする欲求群，すなわち屈辱や批判など他者からのネガティブな攻勢を回避する回避欲求群と服従や譲歩により身の安全を確保しようという服従欲求群と，安心や安全を志向する安楽欲求群に分けられる。したがって保身的欲求群は最終的にはこれら３つに積極的に安全を確保しようとする安定欲求群を加えて，４つの欲求群を構成する。また，対人協調欲求群は，最終的に，依存欲求や協力欲求からなる親和欲求群と，恭順欲求や自己規制欲求など自ら進んで相手に合わせる恭順欲求群の２つに分類される。以上，受動的欲求群は，ツリー上，最終的には，k の回避欲求群から p の恭順欲求群までの６欲求群21欲求に分類される。能動的欲求群と合わせると，59欲求はTable 1の最下部に示されているように16欲求群に分類された。

クラスター分析の結果を Murray の欲求カテゴリーに対応させて検討してみると次のようになる。以下，(A)から(F)までの小見出しは Murray の分類カテゴリーである。

(A)　主として無生物に関係した欲求カテゴリー

獲得，秩序などの欲求からなるこの欲求カテゴリーは，本研究では，能動的欲求群の非権勢的欲求群の積極的活動欲求群に含まれるといえる。

(B)　野心や権力に関係した欲求カテゴリー

優越，達成，自己顕示等の欲求が含まれるこのカテゴリーは本研究では，能動的欲求群に対応するが，優越欲求と自己顕示欲求は権勢的欲求群に，達成欲求，承認欲求は非権勢的欲求群に分かれて分類されている。前者は野心や権力に関係した欲求のカテゴリーであり，大半が後に述べる(D)の力の行使に関係した欲求群と統合されるといえる。

(C)　地位防衛に関係した欲求カテゴリー

ここに含まれる屈辱回避欲求や防衛欲求は受動的欲求の保身欲求群，そのなかでも，回避欲求群に相応するといえる。

(D)　力の行使に関係した欲求カテゴリー

Murray の分類では，ここに力の行使に関係した能動的欲求と受動的欲求の双方がふくまれている。しかし，クラスター分析の結果では，この能動－受動の基準がクラスター分析の第一段階で大きく２つに分離されている。このため Murray のこの分類のカテゴリーは２つに大きく分離される。ここに含まれている支配欲求や攻撃欲求は本研究では，能動的欲求群の権勢的欲求群に含まれ，他方，服従欲求や屈従欲求等は受動的欲求群に含まれる。

(E)　禁止に関係した欲求カテゴリー

Murray はこのカテゴリーとして，非難回避欲求を一つだけあげているが，本研究の結果では非難回避欲求は独立のカテゴリーというより，屈辱回避や嫌悪回避の欲求と同一のカテゴリーで，受動的欲求群の保身欲求群の回避欲求群に含まれている。

(F)　愛情に関係した欲求カテゴリー

Murray の分類では，ここに親和欲求，拒否欲求，養護（援助）欲求，救護（依存）欲求があげられている。愛情に関係したプラスの欲求（親和等）とマイナスの欲求（拒否等）とが含まれていることになる。クラスター分析の結果では，これらの愛情に関係する欲求はいくつかに分かれて分類された。積極的な愛情や恋愛欲求は，能動的欲求の権勢的欲求群のうちの情的支配欲求群に含まれており，援助欲求は能動的欲求の非権勢的欲求群のうちの関係形成欲求群に含まれている。また依存欲求は受動的欲求群の協調的欲求群に含まれている。そして，ネガティブな拒否欲求は，受動的欲求群の保身欲求群に含まれているのである。Murray が愛情に関係しているとして一くくりにした欲求群は，クラスター分析では，その方向性により分離して分類されていることがわかる。

(G)　質問応答に関係した欲求カテゴリー

Murray が分類したこのカテゴリーには認知欲求と証明欲求が含まれている。これらの欲求は本分析では，能動的欲求の非権勢的欲求群の中の関係形成欲求群に含まれると思われる。

以上，Murrayの７分類カテゴリーの内容を本分析と対応させてみたが，両者が対応するケースと分離するケースとがみられる。特に内容的には同一次元で対極的欲求と思われた，たとえば親和と拒否，あるいは服従と攻撃や支配のような欲求を Murray は同一カテゴリーに入れているが，本分析では別のツリーに分かれることが示されている。語義的には対極的と思われるような欲求も，心理的には正確には対極ではなく，各々が共通する側面と異なる側面をもつ欲求であることを示唆していると思われる。しかし逆に本研究では，優位欲求が服従や譲歩欲求と，また挑戦欲求が気楽や安全欲求と同一欲求群に入るというように，意味的に対立すると思われるような欲求が，正負逆の関係のもの，対極的なものとして，同一欲求群に属することが示された。

これまでの本分析の結果は，多数ある欲求が16の欲求群としてまとめられることと，それらの欲求群を階層的構造でとらえることができることを示した。また，それを Murray の分類と比較し，一致する点と異なる点を指摘してきた。しかし，ここに示したのは一つの結果であり，調査に取り入れる欲求の種類や数，各欲求のコンセプトの設定の仕方などによって，得られるクラスターやツリー・ダイヤグラムが異なることが考えられる。事実，本調査の結果も，因子分析の回転の方法を変えたり，因子数を変えたり，クラスター分析の手法を変えたりすることによって，上記のような変化が起こることを確かめている。その中で，かなりよく欲求の種類と構造を明らかにしていると考えられるものを取り上げて示した。

３．大学生の欲求強度

ここでは本欲求調査の結果から現今の大学生の欲求特性についてみていくことにする。

１）強度の高い欲求について

分析の方法で述べたように59欲求につき各 4項目，計236項目の質問に対して，＋3から－3までの７段階尺度で欲求の強度を測定した結果は，トータルの平均欲求強度で男子は平均0.99，女子は0.78，全体で0.89となっている。このことは，被験者の大学生全般が，示された欲求項目について，そう行動をしたいという気持ち（顕在的欲求）があることを

示している。Table 6でわかるように，平均が，したくないというマイナスになっている欲求は非常にわずかで，被験者の積極性や前向きの活動性が示されている。特に欲求強度が高いのは Table 3 に示されるように男女とも，能動的欲求群の非権勢的欲求群中の積極的活動欲求群の欲求である。そのなかでも達成欲求群の自己成長欲求，知識欲求，感性欲求群の趣味欲求，好奇欲求が高い欲求強度を示しており，大学生の趣味や新しいことへの好奇心が強いことを表している。他に欲求強度の高い欲求を個別にみてみると同じ能動的，非権勢欲求群の片方，関係形成欲求群の承認欲求があげられる。また，受動的欲求の協調欲求群の親和欲求，協力欲求も高く，大学生の人間関係形成維持への欲求の強さを示唆している。

逆に欲求強度が低い項目，つまり大学生がやりたくないと思っているのは，受動的欲求の保身的欲求群の回避欲求群に属する服従欲求と優位欲求，能動的欲求群の権勢欲求群の優越支配欲求群に属するネガティブな欲求である攻撃欲求，また女子のみ値の低いのが，同じカテゴリーの反発欲求である。共に能動的，受動的欲求群中の対人勢力に関係している点から，大学生が人間関係における勢力関係を敬遠し，支配することもされることもしたいと思っていないことが理解される。そして，この傾向は特に女子に強い。では人間関係は敬遠されるのかというと，孤立欲求は非常に低く，一人でいたいわけではないことが示されている。権力的対人欲求はもっていないが，情的親和的人間関係を形成しようという傾向が強いことは前述した通りである。人間関係に優劣よりも和を求めているといえる。

2）欲求強度の性差について

まず全体的に性差の顕著な欲求をみていく。前述したが，全体に男子の方が欲求強度が高い。その傾向は能動的欲求群において際だっており，38欲求中の34欲求において男子の方が高く，このように被調査者数が多い場合は t -検定では判定が甘くなるので0.1%水準で判断しても，そのうちの22欲求に有意差が認められる。これらの中で女子の方が高いのは内罰，他者認知，自己認知，自己開示のわずかに4欲求であり，そのうちの自己認知欲求のみに有意差がみられる。これに対して受動的欲求群では，男女差は著しく小さく，21欲求のうち8欲求で女子の方が高い得点を示している。しかし，そのうちで差が認められたのは服従欲求のみであり，それも5%レベルである。また男子の方が高い12の欲求中で0.1%レベルで差が見られたのは，生活安定欲求一つであり，1%レベルに下げても挑戦，自己規制の2欲求が追加されるにすぎない。また，平均値がマイナス値になっているのは，男子が5項目であるのに，女子は10項目である。この点からも男子の方が積極的で行動的であることが示されている。

個々の具体的欲求で性差が著しくあらわれているのは競争欲求や権力欲求など権勢欲求群の優越支配欲求群においてである。このことは，男子の方が女子よりも対人関係場面において積極的にイニシアティブをとり，相手より優越していたいという欲求が強いことを示している。さらに同じ権勢欲求群の片方の情的支配欲求の恋愛欲求および愛情欲求においても，男子の方が女子よりも有意に高いことが明示されており，情的関係においても支配的でありたいと思う傾向が男子の方が強いことを示している。また，能動的欲求の関係形成欲求群の集団貢献欲求，社会貢献欲求，教授欲求においても男子の方が欲求強度が高く，顕著な性差がみられる。貢献や教授は抑制した形での勢力的関係とも考えられ，男子の対人関係における勢力的傾向の強さがうかがえる。

Table 6　大学生における欲求の強度

	欲求		男子 平均	男子 SD	女子 平均	女子 SD	t	p
能動的	a 優越	1 自尊	1.00	1.00	0.71	1.00	3.63	***
		2 競争	0.39	1.13	-0.16	1.10	6.22	***
		3 優越	0.66	1.04	0.09	1.11	6.75	***
	b 攻撃	4 攻撃	-0.11	1.34	-0.57	1.19	4.64	***
		5 反発	0.14	1.26	-0.39	1.25	5.35	***
	c 権力	6 流行	0.83	1.10	0.45	1.00	4.50	***
		7 自己顕示	1.06	1.21	0.41	1.07	7.17	***
		8 指導	0.60	1.06	-0.11	1.00	8.77	***
		9 名誉	0.97	1.28	0.22	1.08	7.93	***
		10 支配	0.54	1.12	-0.23	1.02	9.07	***
		11 権力	0.45	1.33	-0.29	1.10	7.63	***
	d 愛情	12 愛情	1.54	1.06	1.04	1.24	5.43	***
		13 恋愛	1.35	1.03	0.70	1.13	7.60	***
		14 愉楽	1.57	1.22	1.54	1.19	0.31	
	e 自由	15 自由	1.43	0.99	1.36	0.95	0.84	
		16 自己表現	1.07	1.07	0.78	1.08	3.47	***
		17 不満解消	1.84	0.93	1.69	0.93	1.95	*
	f 達成	18 達成	1.64	0.90	1.51	0.81	1.98	*
		19 内罰	1.47	0.86	1.50	0.83	-0.55	
		20 自己成長	1.98	0.78	1.96	0.71	0.42	
		21 持続	1.55	0.90	1.42	0.82	1.86	*
		22 自己実現	1.43	0.95	1.25	0.91	2.42	*
		23 知識	1.90	0.82	1.80	0.75	1.63	
	g 主張	24 自己主張	1.39	0.96	1.13	0.84	3.72	***
		25 批判	1.16	0.98	0.87	0.86	3.89	***
	h 感性	26 趣味	2.25	0.77	2.15	0.78	1.64	
		27 感性	1.73	1.00	1.71	1.05	0.26	
		28 理解	0.79	1.20	0.45	1.16	3.61	***
		29 他者認知	1.12	1.03	1.23	0.95	-1.40	
		30 好奇	2.06	0.87	1.81	0.94	3.38	***
		31 秩序	1.31	0.98	1.17	0.80	1.98	*
	i 援助	32 援助	1.31	0.90	1.28	0.84	0.43	
		33 集団貢献	0.87	1.10	0.52	1.00	4.19	***
		34 社会貢献	1.11	1.04	0.75	0.87	4.73	***
		35 教授	0.78	1.11	0.31	1.04	5.58	***
	j 承認	36 自己認知	1.27	1.15	1.62	0.96	-4.16	***
		37 承認	1.97	0.87	1.94	0.77	0.41	
		38 自己開示	0.79	1.03	0.85	1.03	-0.72	
受動的	k 回避	39 屈辱回避	0.92	1.06	0.92	0.94	0.06	
		40 同調	0.02	1.08	-0.12	1.02	1.72	*
		41 嫌悪回避	1.35	1.02	1.43	0.90	-1.06	
		42 批判回避	0.62	1.07	0.76	0.87	-1.81	
	l 服従	43 服従	-0.51	1.00	-0.35	0.88	-2.06	*
		44 優位	-0.88	1.00	-0.98	0.91	1.26	
		45 譲歩	-0.03	1.08	0.07	0.92	-1.24	
	m 安楽	46 安心	0.31	1.24	0.42	1.06	-1.22	
		47 気楽	1.06	1.14	1.16	0.97	-1.18	
		48 挑戦	0.30	1.27	0.03	1.12	2.84	**
		49 安全	1.11	1.05	1.22	1.00	-1.25	
	n 安定	50 拒否	0.00	1.22	-0.01	1.19	0.04	
		51 金銭	1.54	1.05	1.35	1.00	2.37	*
		52 生活安定	0.50	1.08	0.16	1.08	3.98	***
	o 親和	53 依存	0.87	1.06	0.93	1.01	-0.82	
		54 親和	1.76	0.90	1.71	0.85	0.80	
		55 協力	1.51	0.92	1.46	0.81	0.75	
		56 孤立	-0.86	1.33	-0.99	1.28	1.27	
	p 恭順	57 恭順	1.15	0.90	1.11	0.81	0.62	
		58 自己規制	0.67	1.09	0.46	0.96	2.64	**
		59 迷惑回避	1.79	0.77	1.88	0.73	-1.38	

*** p<.001　** p<.01　* p<.05

全体的に男子の欲求強度が女子に比べて高いことを考慮すると，男子と女子の間で差がない，あるいは女子が男子を上回るという場合は，むしろ特徴的なこととして注目しなければならないといえる。こうした視点からとらえると，まず注目されるのは男子に比べて女子の欲求が強いのは，前述した能動的欲求群の自己認知欲求である点である。男子の欲求が対人勢力に向かっているのに対して，女子のそれは自分を知りたいという自己に向かう欲求にその高さがうかがえる。また，女子と男子とが同じような欲求強度を示しているのは，受動的欲求群の保身欲求群のなかの回避と服従，安楽欲求群中の大半，つまり嫌悪回避，批判回避，優位，譲歩，安心，気楽，安全などの欲求である。また同じ欲求群に属し，男子よりも女子の方が高かった唯一の欲求が服従欲求である。これらは男子が対人関係において優越支配欲求が強いのと対照的に女子は対人勢力の回避欲求が高いことを示している。

以上，欲求強度の性差をみてきたが，統計的に差の認められるものが少なくないが，絶対強度の差はさほど大きくなく，両者のトータルとしての傾向は，一般に考えられているよりもかなり類似している。性差による極端な欲求強度の相違を主張することは，むしろステレオタイプ的見方といえる。しかし，本研究において見られた傾向は，一般的な見方である男性の積極志向，女性の安全志向という傾向と一致する。性差のステレオタイプ的見方は，このような傾向が増幅された結果かもしれない。その意味で性差研究は，性差があることの主張も大事だが，同時に性差が少ないことに言及することも大事であるといえるかもしれない。

引　用　文　献

Berkowitz, L. 1962 Aggression: A social psychological analysis. New York: McGraw-Hill.
Freud, S 1900 The interpretation of dreams. London: Hogath.
Freud, S. 1920 A general introduction to psychoanalysis. New York
Freud, S. 1924～25 Collected Papers (4 vols.) International psychoanalytical library,London.
Freud, S. 1933 New introductory lectures on psychoanalysis. New York: Norton.
Frued, S. 1949 An outline of psychoanalysis. New York: Norton.
Latané, B., & Darley,J.M. 1968 Group inhibition of bystander intervention. *Journal of Personality and Social Psychology*, 10, 215-221.
McClelland, D. C. 1961 The achieving society. Princeton, NJ: D. Van Nostrand Co.
McClelland, D. C. 1975 Power: The inner experience. New York: Irvington.
McDougall, W. 1908 An introduction to social psychology. London: Methuen.
McDougall, W. 1923 Outline of Psychology. New York: Scribner.
Murray, H. A. 1938 Explorations in personality. New York: Oxford University Press.
Schachter, S. 1959 Psychology of affiliation. Stanford, CA: Stanford University Press.
斎藤勇・荻野七重 1993 多変量解析を用いた心理的欲求の構造分析のための基礎的研究　立正大学教養部紀要 27号　331-342.

おぎの　ななえ(心理学)
さいとう　いさむ(心理学)